

事業仕分け・東日本大震災・授賞規程

神戸大学 名誉教授
中川 和道



2009年9月から3年間会長をつとめさせていただいた。平常時なら放射線化学討論会や国際学会の準備とか通常の会長業務が主体なのだろうが、運のめぐりあわせが悪いのか、私の会長時代には天地鳴動のできごとが2つ続いた。2009年11月の鳩山政権による事業仕分けと、2011年3月11日の東日本大震災である。

第1の天地鳴動、事業仕分けへの対応は新米会長にとってまるで天災であった¹⁾。多くの学会長がそうであったように中川も、仕分け会議のリアルタイム配信画像を観るためパソコンの前にくぎづけになった。個人情報保護というお題目のため大幅にぼかされた画像と聞き取りにくい音声、それだけでも疲れた。スーパーコンピューター予算が減額された場面では、「なぜ2番ではいけないのか？」という問題を突きつける仕分け人の画像をテレビで見た人も多かろう。1番でないと論文は書けないし特許も取れないのだから第1次近似解は明瞭だが現実には高次解が必要だ¹⁾。水星探査機の仕分けの場面では、「これが日本国民の生活にどう役立つか」という予め定められた質問が役人からなされた。興味を引いたのは、仕分け人(某大学教授)が「そういう観点からの議論は無意味。人類共通の科学的営為だから、我が国の国民だけが成果を享受するという話ではもともとない」と仕分け人の席から役人に答えたのである。ところがその仕分け人はその後、「意義は分かる。だが、なぜこの額かの説明を求めている」と切り込んできた。あの場面での核心的な質問であった。えらいことだ、と中川は思った。説明責任という言葉が有無を言わず学界に入ってきた。会長と副会長で対応を練り、29学会長の緊急声明を7月30日に出した¹⁾。

第2の天地鳴動は、東日本大震災だ。福島第一原子

力発電所が国際原子力事象評価尺度 (INES) レベル7の原子力事故を起こしてしまった。専門家に任せておけばちゃんとやるだろうと思っていた自分の態度をおおいに反省しつつ会長からの言葉を書いた^{2,3)}。神戸大学でも学内勉強会が開かれ、中川も講演したり個人的に電話を受けたりしたが、驚いたことに物理学の専門家でもセシウム137が広島原爆の168倍放出されたとの保安院の試算の意味を理解できず、原発は広島原爆よりもはるかに少ないウラン装荷量であると信じる教授が多かった。ましてや蒸気でタービンを回していると話すと、量子力学を使ったもっとエレガントな発電方式にとっくに移行していると信じていたと言われ、学問のたこつば化の弊害の大きさをあらためてかみしめ、放射線化学会の対応を探ったもの^{2,3)}。

授賞規程の現代化は、私の会長時代に手をつけたものの詰めが遅れ私の次の河内宜之会長が完成させて下さった。小さな学会に4つもの賞があり授賞資格に在籍年数約20年を課す賞があるなど現代には合わない部分が出てきたのでこれを改善し、公開性の観点や第三者による視点の社会的要請を受けて論文の共著者が推薦者にはなれないことにした。新規程をつくる過程での若手の熱い議論が印象的で、これを大切にしたい。この賞が学会の活性化につながってほしいと願っている。

〈参考文献〉

- 1) 中川 和道, 「会長のつぶやき」, 放射線化学, 90 (2010) 40.
- 2) 中川 和道, 「会長からの激励メッセージ」, 放射線化学, 91 (2011).
- 3) 中川 和道, 「科学, 社会, そして日本放射線化学会」, 放射線化学, 92 (2011) 巻頭言.

Screening of Budget Requests at 2010, Great East Japan Earthquake at 2011, Award Regulations
Kazumichi NAKAGAWA (Professor Emeritus, Kobe University),
〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11
E-mail: nakagawa@kobe-u.ac.jp